

柳生真『日本と韓国、哲学でつなぐ』（モシヌンサラムドゥル社、2022.10.10）

【目次】

第1部 | 韓国の開闢

第1章 | 近代韓国 公共性の展開と他者との連帯

1. はじめに
2. 東学における公共性の展開
3. 日本の資料を通じて振り返る東学農民革命
4. 東学軍「大統領」孫秉熙
5. 義菴の弊政改革活動
6. 3.1 独立運動の宗教連帯と義菴の「公共信仰」
7. おわりに

第2章 | 近代韓国 市民的公共性の成立

1. はじめに：市民的公共性とは何か？
2. 「公共宗教」と 3.1 運動
3. 宗教の役割
4. 義菴が眺望した世界市民的公共性
5. おわりに

第3章 | 大倥教の汎ツングース主義と普遍主義

1. はじめに
2. 大倥教の「重光」
3. 大倥教と「汎ツングース主義」
4. 新しい民族意識の触媒としての汎ツングース主義
5. 普遍主義の契機としての汎ツングース主義
6. おわりに

第2部 | 日本の開闢

第1章 | 近世日本思想の聖人観

1. はじめに
2. 近世日本思想の多彩な聖人観

3. 安藤昌益の聖人批判
4. おわりに

第2章 | 日本新宗教の開闢運動

1. はじめに：「世直し」の定義
2. 日本新宗教と「世直し」
3. おわりに

第3章 | 現代日本の生命霊性と治癒霊性

1. はじめに
2. 3.11 と霊性
3. 日本のコロナ 19 状況と霊性
4. 従来 of 霊性との比較
5. おわりに

第3部 | 実学の視角

第1章 | 19世紀実学者の日本認識

1. はじめに
2. 崔漢綺の日本認識
3. 李奎景の日本認識
4. おわりに

第2章 | 崔漢綺の宗教会通思想

1. はじめに
2. 韓国宗教会通思想の系譜
3. 崔漢綺「氣学」の体系
4. 崔漢綺の世界観と「教」
5. 崔漢綺の「通教」
6. おわりに

第3章 | 韓国・日本・中国における「新実学論」の比較

1. はじめに
2. 韓国・日本・中国の実学に対する新たな視角
3. おわりに

第4部 | 比較の視角

第1章 | 日本における退溪・栗谷・茶山研究の流れ

1. はじめに
2. 江戸時代日本の韓国儒学
3. 明治以後日本での韓国儒学
4. おわりに

第2章 | 崔漢綺と日本の公共思想家比較研究

1. はじめに
2. 中国儒教思想史における聖人と礼楽の議論
3. 日本・韓国の独自の聖人論・礼楽論の転換
4. おわりに

第3章 | 東西洋の公共性研究と韓国的公共性

1. はじめに
2. 西洋の公・私・公共
3. 東洋の公・私・公共
4. 対話を通じて開かれた「公共する哲学」の理念
5. 韓国的公共性の探求
6. おわりに

【出版社書評】

韓国と日本は、古代から今日に至るまで、政治、経済、社会、文化の全方面にわたって継続的に交流と協力または葛藤を継続してきている。時にはその流れが逆転したり、あるいは暴力的（戦争）方法でその関係が飛び火（？）したりもしたが、その関係が本質的に断絶したことは、一度もなかったと言って過言ではない。長い間、朝鮮は日本の文化的発展の源泉となり持続的に影響を及ぼしてきたが、その過程でも日本は独自の学問的、哲学的特性を構築していった。朝鮮から伝来した性理学（新儒学）や退溪学が日本で新しい方法で花開くことによって、その思想の本質をより顕した側面もあり、「実学」の場合は、韓中日でそれぞれの共通点とともに、独自の特性を存分に顕すことによって、東アジアの学問的、思想的発展と社会的多様性の分岐の原因にもなった。

韓国と日本または中国との交流は、自国内に閉ざされたときにもたらされ得る思想的近親相姦の危険性を払拭し、互いに鏡になることで自己理解を強化し、一つの根から分岐され得

る多様性の可能性に対する理解を通じて、その思想の深化と拡張をもたらすという点でも、その意義は少なくない。本書の作者、柳生真は、日本から「公共哲学」を中心とした韓日間の哲学的対話の学問的態度を深く成就し、最も韓国的な哲学としての崔漢綺「氣学」に関する研究で韓国で博士学位を取得し、さらには中国まで行き来してその学問的基盤を拡張し、韓日間の比較哲学のための素養を備えてきた。このような素養と眼目を基盤として、数年にわたる研究は概ね韓国と日本の間で共有される哲学的主題の相似性ととも、その中でも顕著な独自性をあわせて探求することで、それぞれの哲学に対する理解を深める契機を準備した。

第1部では「韓国の開闢」という主題のもと、東学（天道教）などの「開闢宗教」が韓国近現代の市民的公共性を発達させてきたことを論証した。水雲・崔濟愚が「タシケビョク（ふたたび開闢）」を提唱し、東学を創設して以来、開闢宗教は男女と班常、貧富の差異を越えて、みなが神格（ハヌルニム、仏さま）と同格の貴重な存在として尊重し、尊重される社会と世界を構築しようとした。東学における教祖伸冤運動や東学農民革命は、このような世界構築の過程を実践的に推し進める過程であった。また、水雲・崔濟愚と海月・崔時亨を引き継いだ義菴・孫秉熙は日帝強占期という時代状況において、3.1運動を通じて東学農民革命の弊政改革の夢を実現しようとする意志を引き続けた。こうした文脈から、3.1運動は、韓・中・日の3国が互いに独立した対等な国家として一丸となって西欧帝国主義と向き合い、将来は全世界の国々が連帯して、侵略と強権と戦争というもの自体を世界から無くさなければならぬという東アジア的公共性、さらには世界的公共性の確立を志向したことが分かる。このような文脈から、大倭教が「太白山（＝白頭山）南北7千万同胞」（「檀君教五大宗旨佈明書」という「汎ツングース主義」的な同胞観念を提示したのも、朝鮮時代の儒教に立脚した小中華思想のアイデンティティを克服し、近代国民国家としての韓国市民のアイデンティティを自覚させる触媒の役割を果たしたものと見られる。

第2部では「日本の開闢」という主題のもと、今日の顕在化している日本とは異なる「開闢的日本」に対する追求と企図の文脈を探る。日本の江戸時代の多様な「聖人」解釈や、韓国の開闢宗教とほぼ同じ時期に誕生した日本新宗教の新たな世界に対する主張「世直し」などを通じて、日本的「靈性」の追求傾向の特徴を明らかにし、それが時代的に変遷していった推移を探る。日本の新宗教は、1970～80年代を分水嶺として「新宗教」から「新新宗教」という新たな用語によって位置づけられたが、1990年代のオウム真理教の連続テロ事件を契機に宗教自体に対する社会の印象が悪化した上、高齢化の影響まで重なり、2000年代以降はほとんどの宗教において衰退現象が現れた。ところが、2011年の東日本大震災および福島第1原発爆発事故と2010年代後半の自然災害続出、そして2019年末から続くコロナ事態により、日本社会では宗教団体や組織、宗教的カリスマなどに依存しない靈性現象が相次いで現れた。

第3部では「実学」をキーワードとして、19世紀と、「実学」が研究対象となった現代の韓・中・日3国の新実学論を扱う。まず、朝鮮の代表的な実学者である崔漢綺と李奎景の日本観を検討することで、彼らそれぞれの実学的傾向の特質を逆に明らかにしようとした。崔漢綺は「氣学」の土台の上で日本に対する客観的な記述に重点を置いたが、一方、李奎景は豊富な資料に立脚しながらも、日本に対する敵愾心や警戒心を隠さず、差別的な視角を顕しているように見える。

第4部では「比較の視覚」という範疇の下に、「日本における退溪・栗谷・茶山研究の流れ」を通じて、日本内での韓国儒学に対する理解と評価の変遷過程を調べ、特に退溪が日本の近代儒学の発展と近代思想史に及ぼした影響を検討しつつ、日本で朱子学の道統論が明治天皇にまでつづく文脈を探った。また「崔漢綺と日本の公共思想家の比較研究」では、朝鮮の代表的な氣学者崔漢綺と、日本の荻生徂徠、安藤昌益を「公共思想家」という観点から比較し、彼らがそれぞれ独自の視角から儒教的聖人の概念を公共世界を構築する「制作」の側面に注目して論究した。

最後に「東西洋の公共性研究と韓国的公共性—京都フォーラムの研究成果を中心に」では、京都フォーラムで蓄積されてきた議論をもとに、西洋（古代・中世・近代）と東洋（中国・日本・イスラム）、そして韓国の公私観念と公共観の特徴を分析した。特に韓国では中国文献より豊かな公共の用例があるだけでなく、「天下古今公共」という空間性と時間性を含む公共概念が現れるのが特徴的である。また韓国の開闢宗教の中には、(1)人間尊重思想、(2)生態・環境・事物尊重思想、(3)新しい共同体と理想世界(に対する志向)、(4)宗教間対話・疎通・相互理解の公共志向性を見ることができるのである。